

児童文学から〈未来〉へ

「涼宮ハルヒ」の可能性と限界

④

井上乃武

児童文学的（よく分らない表現だが）に谷川流「涼宮ハルヒ」シリーズを語る場合、もしかすると岡田淳『水の精とふしぎなカヌー』（二〇一三）における、ファンタジーの存在に気づかない双子たちとの関連性について考察する方が有意義かもしれない。「涼宮ハルヒ」と岡田淳（村上春樹をそこに含めてもいいかもしれない）をつなぐファンタジーワールド西宮……、という想像は決して不可能ではないが、残念ながら今の私にはこのアイデアを展開するだけの材料がない。したがって、今回はありきたりではあるが、「涼宮ハルヒ」シリーズ、そしてこのシリーズに関する評論が示唆する問題について考えてみたい。

1 「青春の物語」としての涼宮ハルヒ

二〇〇三年に刊行が始まった「涼宮ハルヒ」シリーズは、高校入学最初のホームルームで「ただの人間には興味ありません。この中に宇宙人、未来人、異世界人、超能力者が

いたら、あたしのところに来なさい。以上」と言い放った涼宮ハルヒという女子高校生が、自らは気づかないまま周りに宇宙人、未来人、超能力者を集めてしまうことよって起きるSF的事件と、それに巻き込まれてしまう普通の（ただし、この「普通」という表現にはいささか問題がある）高校生キヨンの物語である。

「涼宮ハルヒ」についてまず指摘しておく必要があるのは、このSFライトノベルシリーズが、読者を惹きつける何か、そして読者が読み解くべき何かを有していることである。

例えば、一見奇矯に思えるSFの設定はハルヒやキヨンの「非現実的な存在に対するあこがれ」と、その背後に潜む日常に対するやや漠然とした不安¹にその根拠を持っている。突然転校した朝倉のマンションを調査したあと、自身自身の存在の卑小さを訴えるハルヒとそれにかける言葉もなく共感するキヨンの姿は、現実世界に対する物足りなさ²が、当然のことながら作中においてという限定はつくもの